

## 大伴家持の独詠歌におけるメトニミー

カレル大学大学院生 トマーシュ・キクタ

多文化共生の可能な社会のために、二つの要素が不可欠であると思う。それは、他文化の「他」を理解することと、その他文化を持つ人たちは自分と同じように、第一に「人間」であることの認識である。言い換えれば、他文化の知識とその他文化を持つ相手の人間性の認識が必要である。そのような知識と認識を養うのに、他文化の産んだ文学を読むことが大変役に立つに違いない。

なお、本発表では、万葉集の編集者の一人とされる大伴家持の歌を挙げ、そのメトニミーの理解に基づく鑑賞について簡単に述べたい。具体的に、文化的な知識を利用するメトニミーの働く歌、また人間の普遍的な体験を利用するメトニミーの働く歌をいくつか挙げ、そのような歌の鑑賞はどのようなふうに他文化の知識を必要とし、どのようなふうに読者の個人的な体験を生かすかについて説明したい。

他文化の知識を求める歌の鑑賞は同時にその日本という他文化の知識を高め、読者の個人的な体験を求める歌の鑑賞は同時にその全く違う文化を持つ人が読者と同じ人間であるということの認識を高めると私は思う。これこそが他文化の産んだ文学を読むことの価値であろう。